

<http://www.kanagawa-la.jp>

Kanagawa Library Association

巻頭言 図書館のこれから	1
特集： 図書館総合展 第19回図書館総合展 フォーラム報告	2
ブース展示報告	3
連載：わたしのイチオシ『修紫田舎源氏』	4

図書館のこれから

地域資料委員長 来嶋 芙実
(大和市立図書館長)

平成29年4月から地域資料委員会の委員長を拝命いたしました、大和市立図書館の来嶋と申します。

自館のことで大変恐縮ですが、大和市立図書館は昨年の11月3日にオープンし、このたび1周年を迎えました。偶然にも1周年当日に累計来館者数が300万人を達成し、この日がさらに特別なものとなりました。

多くの来館者にご支持いただけているのは「居場所づくり」というコンセプトではないでしょうか。世代に関わらず、誰しもが居場所を求めている時代の中、図書館は人と人が出会い、集う場所となり、人と人をつなぐ装置として本がある、図書館の主役は「本」だけではなく、今や「人」にもなりつつあるのではないのでしょうか。

一方で、さまざまな資料を収集・保存し、さまざまなサービスを通じて、すべての人々に提供するという図書館の基本的な役割は不変的なものです。未来に向けて資料を蓄積していく、残していくこと、地域資料委員会の意義はまさにそこにあります。地域資料委員会の前身は郷土・出版委員会と言い、郷土資料等の編集発行を行い、県内図

書館の調査・研究の一助となってきました。

地域資料委員会となってからは今後、図書館では資料のデジタル化が進むことが考えられるため、地域資料のデジタル化についても論題となっています。

来年度、神奈川県図書館協会は90周年を迎えます。その記念事業として、県内図書館で所蔵している地域映像資料のデジタル化を予定しています。地域資料委員会では現在、その選定を進めており、図書館に埋もれている映像資料を掘り起こし、デジタル化することで長く残すことができ、かつ広く利用されるようにしたいと考えています。

現在の図書館は多様化していく機能と、不変的な役割、あるいは学術的な部分と市民サービスの部分、その両方のバランスをとりながら、図書館づくりをしていくことを求められています。自分たちが所属する地域のことを知り、ニーズを知り、自分のまちの図書館をどういう機能を持った図書館にしていきたいのか、目指す方向を問われているように感じます。

「すべての人に資料を届けるために～知的障害者と図書館～」

(11月9日実施)

第19回図書館総合展フォーラムでは「すべての人に資料を届けるために～知的障害者と図書館」をテーマに、大和大学保健医療学部教授の藤澤和子氏の基調講演を行いました。

2016（平成28）年4月「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（「障害者差別解消法」）が施行され、公共図書館においては合理的配慮の提供が義務化されたことに基づき、これまで公共図書館が行ってきた多様な背景をもつ地域住民へのサービスの一つとして「障害者サービス」を行い、読書支援を行う形で取り組みを行ってきたところが多いと思われます。が、しかしこれまでの枠組みでは、主に身体障害者を対象としたサービスについて議論がなされ、知的障害者についてはこれから議論が求められるところに差しかかっています。

そこで今回、知的障害者を対象に、図書館サービスのニーズと提供する公共図書館側の支援体制の実態を知り、さらに実践を始めている公共図書館の取り組み事例を紹介して、的確な合理的配慮とはなにかについて考える機会となるよう、企画しました。

基調講演の中では、知的障害にはどんな障害特性があるか、また個人差が大きく多様であることの説明から、2016年に行われた実際のアンケート結果（「知的障害者の図書館利用の実態とニーズ調査」）より、どういった当事者の図書館ニーズがあるのかの紹介がありました。またLLブック（スウェーデン語の「LättLäst」の略で「やさしく読める本」という意味。生活年齢に応じた内容がわかりやすく書かれている本、一般図書と同様のジャンルで、読み能力に応じた難易度のレベルをもつもの）や、マンガ、マルチメディアDAISYといった知的障害者にニーズのある資料の紹介などもあり、実際の事例を元とした分かりやすく、興味深いものでした。事例報告の他にも、実際のアンケートをもとに説明があったため、わかりやすく知的障害者の方に必要なことを知ることができました。会場アンケートでも、「アンケート調査の結果を聞くことができるとても参考になった」の意見が多くみられました。

事例紹介では、文部科学省科学研究費助成事業「公共図書館における知的障害者のための合理的配慮のあり方に関する研究」研究委員会が主催し、奈良県の生駒市図書館と桜井市立図書館が共催で行った「知的障害の方のための読書支援サポート講座」について桜井市立図書館長の岩本高幸氏より報告がありました。

知的障害のある方が読書を楽しみ、必要な情報を得ることができるように、知的障害についての理解を深め、わかりやすい資料の提供やサービスについて学ぶことを目的とし、2017年9月22日に生駒市図書館（生駒市図書館）、9月29日と10月6日に桜井市立図書館で開催された講座の内容が紹介されました。講座受講者から実習が大変好評だったことや、申込が殺到したため定員を当初より増やしたことを聞き、実習の大切さや障害者サービスへの関心の高さを知ることができました。こちらの事例報告についても、会場アンケートのご意見として「もっと桜井市の事例を聞きたかった」という意見が多く、こちらも関心の高さを感じました。

その他、会場の声として「障害者サービスの必要性は常々感じてはいるけれど、研修の機会が少ないため、今回のフォーラムはとても参考になりました」「自分の館でできることからやっていくためには、と考えさせられました」「今後の事業の参考になりました」など意見も多くありました。講演の中で「大切なのは各図書館でできることから始める」というお話がありましたが、あらためてその考えをもとに図書館サービスの充実に努めていきたいと思いました。



(神奈川県図書館協会 研修委員会)

特集：図書館総合展 第19回図書館総合展 ブース展示報告

(11月7～9日実施)

今年も広報委員会では、11月7日～9日パシフィコ横浜で開催された「第19回図書館総合展」において、神奈川県図書館協会の展示ブースを開設いたしました。

展示内容は昨年に引き続き、神奈川県図書館協会の紹介、加盟館一覧、各委員会の概要と活動報告のパネルの他、協会刊行物を展示いたしました。

また昨年度好評だった文庫本用ブックカバーを今年度も作成しました。今年は表面に神奈川県内の図書館7キャラクター（川崎市、平塚市、相模原市、神奈川近県文学館、横浜市、横須賀市、県立川崎図書館）をクイズ形式で並べ、裏面には加盟館分布図を入れ、配布しました。キャラクターのクイズ形式はやはり好評だったことに加えて、このブックカバーは2色あり、加盟館分布図別（公共図書館版、大学・専門機関版）に分かれていることに驚かれる方が多くいらっしゃいました。文庫本のブックスタンドとして「レシートロール芯」のリサイクル工作を使用しましたら、

「以前神奈川県図書館協会のブースでこれを見て、自分の館でも使っています」という方が何人もいらっしゃいました。神資研ブースと隣り合わせだったこともあるのでしょうか

神奈川県下の図書館の多さとともに、大学・専門機関図書館と一緒に活動を行っていることをあらためて感心した、とのご意見や、「神奈川は館種を超えて、郷土資料への取り組みからリサイクルまで、幅広くいろいろなことを取り組んでいるんですね。まだまだ図書館が元気だということを見せてください。」と声をかけていただき、ありがたく感じました。

神奈川県下の話題として大和市立図書館の開館については展示ブースを訪ねた方にも

「もう行きましたか？」等聞かれることも多く、やはり皆様の注目を集めていることを実感しました。

その他「郷土資料のデジタル化について」等の質問の他「図書館で働くためにはどうしたらよいですか」と学生の方々から質問を受け、改めて、初心にかえって自分たちが図書館員として働いていることについて向き合う機会にもなりました。

今年のブース来訪者は3日間で337人と昨年を少し上回りましたが、来年度は神奈川県図書館協会の90周年の式典なども計画されているようですので、さらに充実したブース展示をしたいと思いました。



(川崎市立川崎図書館 吉井 聡子)

連載：わたしのイチオシ

相模女子大学附属図書館 『修紫田舎源氏』

『修紫田舎源氏』は、柳亭種彦作、歌川国貞画により、1829（文政12）年から1842（天保13）年までに38編が刊行された合巻（39・40編は草稿のみ）である。合巻とは、数冊を綴じ合わせて一冊に仕立てたことに由来する。

相模女子大学附属図書館では、初編から38編各2冊、合計76冊を所蔵する。初編から3編は再刻本、6編までは後刷だが、7編以降は初版本となっている。残念ながらすべてが初版ではないが、まずは全冊揃いであることが、先学の功績と言えよう。

内容は、紫式部の『源氏物語』を下敷きに、室町時代に世界を移した、いわゆる翻訳作品と評される。光源氏ならぬ光氏は、足利義正とその寵愛を受けた花桐の息子。その光氏が女性遍歴を重ねながら三種の宝を探し出すとともに、将軍の地位を狙う山名宗全らを滅ぼすというもの。スリルとサスペンスに富んだエンターテインメント作品としてひろく支持された。

内容はもとより、国貞の絵がその人気の一端を支えていた。ふんだんに描かれた挿絵はもとより、表紙は、二冊一続きの構図となっており、続絵と呼ばれる。美しい造本で、現代の学生たちの人気も高い。

だが、この絢爛豪華な世界観が結局は大奥をモデルにしているとの噂を生み、天保の改革の折に絶版を命じられることとなった。

（相模女子大学学芸学部日本語日本文学科
教授 武田早苗）

